

講演

復興と平和構築

西田 恒夫

広島大学学長特命補佐（平和担当）

平和科学研究センター名誉センター長

こんにちは。ご紹介をいただきました西田でございます。阿部先生の素晴らしいキーノートの後で話すのは極めて難しいものがありますが、限られた時間、20分間、お付き合いをいただければと思います。

本日のシンポジウムの議題は「復興」それから「ピースビルディング(peacebuilding)」です。阿部先生も自ら言っておられたように、ピースビルディングの前にコミュニティをといて、阿部先生のお話は非常に示唆に富む、地に足の着いた実証的なお話をいただいたと思います。

私が、この大震災のニュースを最初に聞いたのは、私が国連大使をしている時で、ニューヨーク時間の早朝、当時の事務総長だった潘基文（パン・ギムン）さんから電話がかかってきて、「西田大使、まずお悔やみを申し上げたい。大変なディザスター（disaster）がありました」と言うのです。私は、もちろんその前に、何か起きたというのはメールで知っていたのですが、まだ具体的なイメージがなかった。日本の外務大臣も、出先に200も300も大使館がありますから自分で電話はできない。国連事務総長が私の所に、その第一報

のお悔やみの電話を入れてきました。

そして、彼の趣旨は、日本政府および日本国民に心からお見舞いを申し上げますということと、当時は菅（直人）さんが日本の総理でしたが、自分とはとにかく菅さんに早く連絡をしたいのだと、すぐに被災地に行きたいという話でありました。結果的には、もちろん受け入れ等々の準備がありますが、割と短期間、2~3カ月後には私がお供をして、今いろいろとお写真を見せていただいた所を訪れ、被災者の方ともお話をした経験を持っています。

当時、ニューヨークでは、私の同僚も含めて、ニューヨーク市民、国連関係者、各国の大使のみならず、弔問記帳で長蛇の列ができておりました。この手のものは、どこかの国の元首が亡くなられる、また現役でなくても先代の元首が亡くなると、だいたい弔問のノートを開いて、大使連中はそこへ弔問のあいさつに行くというのが、ある種、外交的な仕事の一環ではあります。そのような場合、大変不謹慎な話ではありますが、business as usual という感じで来て、サインをして帰る。

ところが、今回の東日本大震災の場合には、

各国の大使、事務総長をはじめ、長蛇の列ができて、かつ、そのノートには普通は名前とせいぜい1行か2行しか書かないものを、人によっては1ページも2ページも書いているのです。泣きながら書いている。各国の大使あるいは事務総長の後ろで私は侍立して見ていましたが、そうすると、最初にこの辺から揺れ始めて、そのうち人によっては大声を出して泣く人もいます。

私は、自分の長い外交生活で、最も印象が強く、ある意味で感動的な場面に接しました。残念ながら、日本や世界にとっては大変な不幸でありましたが、その時にある意味では、やはり世界は一つだと感じました。このような非常に極限的な状況にある人に対して、仕事だからというものを越えて、人間が人間として直接的に物事をシェアする。そして、喜びもシェアするけれども、悲しみもシェアするというのを見て、私は改めて外交というものとはそういうものだろうと思った次第であります。

復興、平和構築というの、ある意味では、そういう話につながるところがあって、私は、これらのことを聞かれると、人間として持っているコンパッション (compassion) が全ての始まりであるということをつもっています。コンパッションとはなかなか日本語で表しにくい言葉で、共感をもう少し超えた強い言葉ですが、それに始まって、それに終わる。

特に、今のようにグローバル化で、阿部先生の話にもありましたが、人がつくった災害、紛争、戦争、あるいはテロといった話と、それから自然災害というものの境がだんだんなくなっている。例えば、東北大

震災の福島の話についても、必ずしも100%自然災害だけではありません。私は、福島のことを見ると、人災の部分がすごくあると思います。

それから、先ほどのお話にもありましたが、当時ニューヨークでは、「なぜ、日本人はあんなにディシプリン (discipline)、きちんと対応するのだ。無政府状態のはずなのに、その間に妙なことが一つも起きないのには信じられない」というふうな。これは、みんなそう言っていたわけです。

ところが、復興が始まってくると、どうも政府の対応は良くないというわけなのですね。もともと比較するのは変ですが、最初に行われた政府のいない、地方の行政のない状況における日本人のパフォーマンスのほうで、ずっと素晴らしいのではないかということになり、当時言われたのは、「日本人はすごい」「日本人はかわいそうである」ということでした。そのつながりの真ん中の言葉は要するに、「日本の政治はなっておらん」と、そういうことが当時のニューヨークではもっぱら言われていました。その政治あるいは行政の一部である私が、それを聞いて、そんなことを紹介するのはおかしな話ですけれども。

ですから、やはり物事はコンパッションの部分と、インスティテューション (institution)、物事の基準、レギュレーション (regulation)、それから公と私の判別、そして協力。このインスティテューションをどうやってビルディングしていくかということと、全体の総合的なものがないと、結局、片方だけいくらヒロイック (heroic) なものがあっても、ハリウッ드의映画を見ているわけではありませんから、その極端な状況も、

それが日常になる必要がある。

最近の流行りの言葉で言うところの持続性、サステナビリティ (sustainability) という言葉を使っていますが、持続するということをもって意味がある。一回のお祭りでは意味がない。ここの部分が非常に大事で、あえて言えば、日本人はこの部分があまり得意ではないのではないかというのは、少し思っている次第です。

復興、それから平和構築について。復興と言うと、今のお話のように割とイメージがあるし、使われてきた日本語ですが、一方の平和構築は何かよく分からないですよ。たぶん、皆さんが学校で最初に習う平和の後に云々くっついている言葉は、「平和維持 (ピースキーピング : peacekeeping)」ですね。しかし、聞いたことはあるような気もするけども、正直言ってよく分からないというのが大半の皆さんの印象ではないかと思います。これは、ある意味で、いわゆる研究者、あるいは国連のジャーゴン (jargon)、つまりその間でもって伝わる、職人さんには職人さんの言葉があるみたいなものであって、ピースビルディングとか、ピースキーピングとか言うけれども、ピース何とかはよく分からない。しかし、これでもって飯を食っている人がたくさんいるので、そういうことになっていく。

ピースキーピングでよく聞くジョークは、ピースキーピングというのはピースをキープするわけです。平和を維持する。しかし、ピースがあるのなら、なぜそんなことをする必要があるので。ピースビルディングはピースをつくるのだから、むしろ順番は、まずピースビルディングで、ピースキーピングになるのではないかと思います。国連用語で

はこれは逆なのですね。

ピースキーピングというのは、紛争があったときに両方の当事者が、自分たちはそれなりに休戦した、平和条約はできていないけれども休戦したと。ところが、緊張関係だし、もともと好きではないといったときに、国連の人に真ん中に入ってもらって、停戦の状態が続く、あるいはここのラインで守ってもらうということをして、例えば、将来的に選挙をする。そのときには選挙を監視してもらって、また紛争の前の状況で、より平和で、より民主的な社会構築のための案内役を国際社会にやってくださいというものです。

ところが、ピースキーピングは、世の中にはたくさん問題がありますから、いつまでも国際社会が面倒を見切れない。一つの大きなメルクマル (Merkmal) は選挙が行われたというので、選挙ができてよかったね、だから大統領もできた、首相もできた、皆さん、これでさよなら、と言って国際社会は引き揚げようとする。すると、何のことはない、また数カ月後に暴動が起こって殺してしまったという話を聞いて、先ほどの話ではないけど、これはどうもサステナビリティにならない。そういうことで、単にピースをキープするだけではなく、より意味のあるサステナブル (sustainable) のピースをビルド (build) する必要があるということになり、ピースビルディングなのですね。ピースビルディングは非常に広い言葉で、要するにピースをキープしたものがより定着して、持続性のある開かれた社会のために何ができるかと。

すごく簡単に言えば、軍隊の代わりにお巡りさんが来る。なぜお巡りさんが来るのかと思われるかもしれませんが、軍隊というのは、

要するに敵対する勢力の間に入り、重装備をしてやるもの。PKOは重装備をしていませんが。しかし、警察というのは、英語ではシビルポリス（Civil Police）と言っていますが市民警察で、これは治安。戦争ではなくて、紛争ではなくて治安。皆さんの安全、市民生活の安全を守るためにポリスが来る。

それから、例えば裁判官が来るのですね。なぜ裁判官が来るか。そのような社会においては混乱していますから、裁判制度がきちんとできていない。一番簡単なのは、まず行政政府ができる。大統領が選ばれるとか。ところが大統領ができて、それで民主的な国家はできないので、もう二つは要るわけです。一つは議会。ただ、この行政府と議会は、だいたい選挙というものを通じて両方同時にできます。残り1本は裁判、司法制度なわけです。

なぜ司法制度がそんなに重要かという、一つは、先ほどの法律というものをみんなにどうやってデリバリーするかという仕組みと、悪い人がいたら捕まえるというのと同時に、ここが大事ですが、市民個人個人が守られる必要がある。新しくできた行政府とか議会は、権力、パワーですよ。権力が皆さんの生活に必要以上に過度に入ってきて、場合によっては抑圧するのであれば、人権を守る必要がある。

そういう意味で司法は、国の秩序を守るといふ役割と同時に、市民一人一人の人権、利益を守るといふ二面性を持っていますが、これはなかなか開発途上国というか、紛争の多いところでは理解しがたいし、多くの開発途上国ではそういう意味での警察はありません。つまり軍隊だった人たちがアルバイトで

やっているような警察ということで、市民警察という言葉を理解してもらうこと自体が非常に難しいわけです。

このような膨大な、つまり政府をつくる、英語で言うところのインスティテューションビルディング（institution building）もやるということは、場合によっては、教育制度も必要かもしれないし、大学も必要かもしれない、義務教育も必要ですね、となってくる。それから、考えてみれば病院も大事ですねというふうに。このような市民が市民社会としてサステナブルであるためのことをピースと称して、これをビルドするというのがピースビルディングであるわけですね。

ですから、聞いただけですぐお分かりのように、時間がすごくかかるのです。そうすると、世の中でAからZまで問題を抱えているときに、国連が一つの代表だとすると、国際社会が全部の問題をやれるのかと。阿部先生がおっしゃったように、あちこちで起こっている災害に全て出掛けていって何かしようとする、マニュアルか何かは持っているかもしれないけれども、その国その国の特異な状態がある。これからの発表ですと、例えば朝鮮半島の話、それからアイルランドの話等々、いろいろな個別な事例が出ると思いますが、そういったローカルなものについての知識等々がないわけです。

あるいは、その人が持っている知名度ですね。日本人が仲介とか仲裁に活躍しにくいのはなぜか。日本人がアフリカに住んだ経験がある人は何人いるかと、同じようなことですね。ですから、日本の国の強さであるモノリシック（monolithic、均質的）な社会というものが、国際社会に出ていって何かしよう

するとデメリットになる。

「自分はアフリカとヨーロッパのフランス人との間の子供です。アフリカに十何年いました。学校ではアフリカの友達が多いです」という人が、例えば国連の代表、あるいは日本の代表で「私はお役に立ちませんか」と来れば、「ああ、そうか。この人は日本人だけど10年間もアフリカにいて、お父さんはアフリカ人なんだ」と。すると、アフリカの人は少なくとも聞いてみようかと思う。

ところが、そうではない100%日本人という人が来れば、それは素晴らしい人、立派な人なのだろうけれども、この人と話して分かるのかなと。「アフリカ、何回目ですか」「いや、4回目ぐらいかな」、「こういう人にあまり仕切ってもらいたくないよね」ということになる。そうすると、インスティテューションをつくるのが大切なと同時に、もう一つはそのような個別の人材をつくっていく必要がある。

北朝鮮問題で、先ほど言ったように、どうしても日本の場合には、PKOで自衛隊を出す、出さないという話でもって議論が始まり、議論が終わってしまう。ところが、国際社会が関与してピースビルディングをするときには、皆さんの職業、あるいは学生として出ていくこともあり得るし、NGOという集まりで出ていくこともある。ですから、このピースビルディングなるものは、単に戦争・平和だけの問題ではなく、病院から始まり、司法制度から何でもかんでもあつて、つまりシビリアン(civilian)の需要が山ほどある。だから、皆さんの出番が本当はすごくある。

そして、日本は世界で非常に好かれている国、非常に尊敬されている国です。時間がな

いので単純化して言えば、日本みたいな国になりたいと思っている指導者は山ほどいるわけです。ですから、日本からいい人に来てもらいたいと言われて行くのですが、まず英語があまりよく分からない。そして話をすると、どうも理科系のほうは共通語で話しているからまだ分かりますが、文化系になった途端に、例えば日本で夏目漱石と言っても、「夏目漱石はあまり知らないのだけだね」と、このような反応になる。

あるいは法制度。日本の法制度、法律を学ぶことが、その人にとってのキャリアにどのくらい役に立つのか。日本が世界のミラクルをつくっていくようなときであれば、例えば、アフリカの人でもアジアの人でもいいかもしれませんが、日本語を勉強して日本の法制度を勉強していくと、将来の自分のキャリアパスに非常に大きなプラスになることはあります。

今、起きていることは中国語ですよ。中国語を勉強することにより、自分の職業の選択の範囲も広がることになる。今は、もともとモノリシック(monolithic)な社会であるのにプラス、この部分で元気がなくなってきているのでどうするかという、非常にターニングポイントに来ていると思います。

時間がありませんので、ここでかなり強烈にブレーキを踏んでストップをかけますが、何が大事かという、まず何が要求されていて、日本の国がフィットしているのか、していないのか。世界の人たちが日本に対して持っている期待感というものと、日本人が実際に提供できる能力、ノウハウ、スキルというものに、残念ながらギャップが出てきている。

ところが、この辺の意識を、マスメディア

も、大変申し訳ないけれども大学も含めて、きちんと教えていない。そこがあまり自覚されないので、世の中のニーズからだんだんずれていっているということが、あまりよく分からない。分かるのは、中国に抜かれたとか、韓国は生意気だとか、この話ばかりしている。しかし、この話ばかりしていても、あまり意味はありません。

もちろん人間ですから、国ですから、相対的に自分を見ることはやらざるを得ない。でも同時に、絶対的に、よりグローバルなものさしの中で、日本はどのような立ち位置にいて、どのようなものがオファーできるのか、どのようなものを国際社会から受容できるのか、もう少し客観的に自分を見つめるという努力をしないと非常にまずいのではないかと思います。

非常にインコンクルーシブ (inconclusive) で、あと 5 倍ぐらい話したいのですが、時間ですのでここでやめして、また後ほど、パネルディスカッションの時に質問等がありましたら喜んでお話ししたいと思います。ありがとうございました。